〈編集後記〉

新編集編集委員会を代表して一言

この度，山倉拓夫理事が26巻1号の編集をもって，周囲の強い要請にもかかわらず，頑強な意志のもとに編集委員長を辞められることになってしまいました。ほかに代わる人材もいないなかでの辞任であり，また会誌編集についてはまだまだ課題が山積していることもあって，極めて残念なことであります。山倉前委員長は，現在の関西自然保護機構会誌の礎を築いた山岸哲元編集委員長の後を引継ぎ，第2の大きな改革を行いながら，編集委員長自らが編集，執筆，校正，英訳，その他編集作業の雑務までもこなすなど，会誌編集に対する業績は計り知れないものがあります。ここに，改めて深甚なる敬意と感謝の意を表したい思います。また，そうした業績の一端は，山倉前編集委員長の26巻1号の編集後記「地方自然誌の専門誌をめざして」に，奥深い文章で切々と述べられていますので，会員各位の一読を希望します。

こうした，お二人の偉大な業績を個人的な立場で引き継ぐことは難しく，また，その任を無理しても引き受けてくれる人材がいなかったのも事実であります。そこで，紆余曲折を経ながら，編集幹事として前迫ゆり理事を中心にした新進気鋭の編集委員と，山倉前編集委員長には無理をお願いして相談役として残留していただき，私が名目だけの編集委員長を引き受けるという，言わば協働体制の形に落ち着きました。せっぱ詰まった妥協の結果の編集委員会ではありますが，前迫編集幹事を中心とした柔軟性ある編集委員の協働による編集作業を側目していますと，将来，会誌に第3の大きな改革がもたらされるであろうことが大いに期待されます。しかし，会誌に対する改革や斬新な編集等が実行される過程においては，時として批判や外圧，問題・課題，さらには多少の失敗などにさらされることも考えられます。そのような場面にだけ，編集委員長として助言や支援，また壁になったり，お手伝いをさせてもらう所存であり，前迫編集幹事には大変申し訳ないのですが，実に楽な立場に勝手に座らせてもらっています。

ところで，この関西自然保護機構会誌26巻2号は，若い活力ある編集委員と前迫編集幹事の熱意のこもった編集作業の結晶であり，また，きらりと輝くような新しい発想も見られる内容となっています。今後，会誌の内容が，さらに充実，発展していくためには，何をおいても会員各位の積極的な原稿の投稿が欠かせません。一方，関西自然保護機構の存続が危ぶまれるなかで，新体制の編集委員会には，編集幹事をはじめとして元気な若い力が漲っており，そうした危機も近いうちに払拭されるような予感さえしてきます。関西自然保護機構を設立し，今日までに発展させていただいた著名な数多くの諸先輩から叱責を受けるような結果や将来に禍根を残すことなどにならぬような最善の努力が問われているなかで，今こそ，関西自然保護機構活動の大黒柱である会誌発行の着実な進展が求められていると考えます。最後に，会員各位の絶大なるご協力・ご支援をお願い申し上げて編集後記とさせていただきます。

（小林圭介）

自然への真摯なるまなざしを引き継いで

関西自然保護機構会誌の名編集委員長として，長年にわたり手腕を発揮された山倉拓夫先生から編集事務局を引き継ぎ，新体制はじめての会誌発行を迎えます。今夏，大阪市立大学の山倉研究室で，編集事務局を私の研究室で引き受けるようにとのお話をうかがったときは，天地がひっくりかえるほどに驚き，即座に，つつしんでお断りしました。しかしその折，ある国際自然専門誌を視野に入れながら，地方自然誌の専門誌たるべく会誌編集をすすめておられることなどをお聞きし，その真摯な編集姿勢に感銘を覚えながら帰路につきました。力不足で私の任ではないことを十分に認識しつつも，KONCへの深い思い入れもあって，結局，編集事務局をお引き受けすることにいたしました。どうぞよろしくお願い申しあげます。

さて事務局長として，また編集委員長として日夜ご尽力されている小林圭介先生の迫力ある編集後記に，関西自然保護機構としての新たな決意と懐の深さを知る思いです。自然環境の崩壊と生物の局地的絶滅が加速度的に続く今こそ，関西自然保護機構の活動が必要であり，会員のみなさまの自然にたいする真摯で熱いまなざしが，会誌を支えると信じています。

今号は，100人近い参加者を得て，白熱した討論が繰り広げられた淀川汽水域に関するセミナー特集（於　大阪市立自然史博物館　2004年2月1日実施），地域の生物についての興味深い原著や報告，理事長渡辺弘之先生の世界が展開する土壌動物のお話，そして新シリーズ「自然へのアプローチ－今，若い研究者がとりくんでいること－」から構成されています。シリーズ第1回目は，大阪市立大学動物社会学研究室で琵琶湖のイサザ研究にとり組む学生や院生の視点をご紹介頂きました。

関西自然保護機構の活動の重要性を切に感じ，誠に微力ですが，会誌発行に努力したいと思っております。会誌充実に向けてみなさまの原稿と率直なご意見を心よりお待ちいたしております。

（前迫ゆり）